

## [094] 語文研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/10172>

---

出版情報：語文研究. 94, 2002-12-26. 九州大学国語国文学会  
バージョン：  
権利関係：

〔会員著書紹介〕

藤井茂利著

『東アジア比較方言論』

副題に「甘諸」「馬鈴薯」の名称の流動」とある。これは、先に公刊された『古代日本語の表記法研究 東アジアに於ける漢字の使用法比較』（平成八年七月、近代文芸社）の付録（二）で触れた、朝鮮半島におけるサツマイモ（甘諸）とジャガイモ（馬鈴薯）の方言分布に関する研究を、敷衍し深化させた論考である。もとより単なる言語地理学の応用ではなく、「はしがき」に見える次の一文が端的に表現しているように、中国・朝鮮・日本をめぐる言語文化の交流史に主眼がある。

「東アジアの比較言語研究は、各語の祖語を考えるのではなく、他の東アジア語とどういう関係で結ばれているかを考えていく新しい学問であると、理解すべきである。その具体的研究として「甘諸」の食品名の東アジア各国の關係について論じてみることにした。」

- 一 「甘諸」の対馬方言
- 二 朝鮮通信使が持ち帰った「甘諸」
- 三 韓国の方言調査

四 「甘諸」の方言「コググメ」

五 「甘諸」の方言「コググマ」

六 「南山俗語考」の漢語の発音

七 「甘諸」の方言「カムジ」

八 「甘諸」が訛つて済州島・半島に

九 「甘諸」の方言「カムジ」

十 「馬鈴薯」の方言「カムジ」

朝鮮通信使を介して甘諸とその対馬方言「コイモ」が朝鮮半島にもたらされること、中国南方から琉球・薩摩・済州島を経由して全羅道に「カムジ」の語が伝えられたこと、等を丁寧論証し、また、馬鈴薯を「カムジ」と呼ぶ地域があることの理由を、馬鈴薯に似た白色・丸形の甘諸の存在から明らかにしている。

政治的に南北に分断された現状では半島全体の調査には自ずと限界があり、故小倉進平博士の戦前の調査等を援用せざるを得ない面もあるが、可能ながぎりのフィールドワークも行ない、『諸国物産帳』『南山俗語考』等々の古文献も駆使した一連の作業は、東アジア日本語教育・日本文化研究学会を主宰する著者ならではの、スケールの大きな仕事といえよう。（平成十四年一月 近代文芸社 B 6 判 一六一頁 一、五〇〇円）

後藤昭雄 著

歴史文化ライブラリー 133

## 『天台仏教と平安朝文人』

平安時代の漢詩文は仏教と関わりが深い。本書では漢詩文の作者である文人たちと僧侶たちとの交渉という視点を軸に平安時代の漢詩文の世界を描き出している。目次は以下のとおりである。

### 漢詩文と仏教

最澄（漢文学史上の嵯峨朝／文華秀麗の詩／経国集の詩）  
円珍（惟良貞道／春澄善繩／菅原是善／三善清行と藤原佐世）

良源（尚歯会／安和の尚歯会／良源と藤原在衡の唱和詩）  
橘在列（尊敬（沙門敬公集序／出家後の詩文制作））

慶滋保胤（寂心（文人官僚として／在俗時の作品／出家））  
性空（書写山上人伝／結縁を求めた人びと）

### 勸学会（勸学会とは／勸学会の展開）

讚（延暦寺東塔法華三昧堂壁画讚／天台大師画讚の受容）  
「最澄」、「円珍」、「良源」の項では文人とのそれぞれの交流が詳細に描かれている。「橘在列（尊敬）」の項では伝記と出家以前以後の執筆活動について、「慶滋保胤（寂心）」の項では出家の要因や出家後の執筆活動についてそれぞれ記され

ている。「性空」の項では彼自身の作品や交渉を持った文人たちの作品が取り上げられている。そして、文人たちと僧侶たちの交渉の場であった「勸学会」、後の文人たちによる称赞文である「讚」について述べられている。

本書は今まで比較的知られていなかった資料や『無名仏教摘句抄』や『勸学会記』など近年知られるようになった新資料などを読み解き記述している。また、写真や原文が多く引用されており、著者があとがきで執筆の意図を述べているように、平安時代の仏教に関わった漢詩文を広く一般の読者に知ってもらうことができる著書である。

（平成十四年一月 吉川弘文館 B6判 二二五頁 一、七〇〇円）

## 『奥の細道』

現代人の古典離れが深刻な状況にある今、古典教育の在り方が改めて問い直されている。その中で、『奥の細道』を美しい現代語によって訳し、紹介した本書は、若い人々にいに古典の魅力を伝えるかという問題に、一つの解答を与えてくれていると言えるよう。

小中学生向けに書かれた本書には、初学者に対する細やかな配慮が随所に見られる。例えば発句の部分では、解釈を芭蕉の言葉として予め本文に織り込み、その後で句を出すという形式を取ることで、韻文に馴染みのない読者でも自然と句の世界に入っていけるようになっていいる。また、『奥の細道』の記述の典拠となる和歌が、訳を併せて豊富に紹介されているのも、大きな特色の一つであろう。これらの歌の中に芭蕉の句を置くことで、芭蕉が文芸の伝統を尊重し、それらをしっかりと踏まえていたこと、しかし和歌とは異なる「具体的に はっきりと」した表現を取ることで、新しい俳諧の世界を築いていったことなどが、改めて読者に了解されるのである。

本書の訳はまた、著者の『奥の細道』に対する鋭い読みを十二分に反映したものとなっている。例えば、湯殿山での句

を「恋に胸をいためている乙女」のようだ、と評された芭蕉が、心中で「やったゾ」とさげん」だ、という記述。『芭蕉論』（筑摩書房、一九八六年）を読んで、一句の「涙」に込められた二重の意味を知る者ならば、このくだりで思わず会心の笑みを浮かべることだろう。この書は、そうした楽しみ方もできる一冊なのである。

いわゆる直訳調でない、芭蕉の心そのものなまでに深く迫るような文章は、芭蕉が『奥の細道』で示そうとした、「心の奥をずっとかなたまでつづいている細いひとすじの道」（あとがき）をも浮彫りにしている。作品の解釈のみならず、「古典をいかに読むべきか」という姿勢そのものを示した本書は、今後の古典教育における一つの重要な指針となるであろう。

（平成十四年四月 ポプラ社 A5判 二二二頁 一、四〇〇円）

板坂耀子 編

『近世紀行文集成』第一巻蝦夷編・第二巻九州編

近世の紀行作品は、現在確認される所で二千五百点あまりにも及ぶ。しかし、その多くは文学的価値が低いものとして、近年まで関心をよぶことがなかった。

このような状況にあつて、編者は長年に亘り資料の収集、さらにそれ等の翻刻を弛むことなく行つてきた。翻刻という地道な作業の中にあつて、ひたすらに正確さを求めて行われしてきた集積が、本書、『近世紀行文集成』である。

各巻は、近世紀行の多様性をふまえ、近世の紀行に精通した編者ならではの編成をとる。例えば、蝦夷編は、人々が目にしたことのない土地の産物、風俗を具体的、かつ写實的に描写を行う。蝦夷紀行の性質に配慮した選択の結果である。

第一巻 蝦夷編 『蝦夷の嶋踏』・『蝦夷蓋開日記』・

『未曾有後記』・『蝦夷行程記』

第二巻 九州編 『旅の恥かきすての日記』・『膝打毛』・

『筑紫富士夢物語』・『佐藤信淵九州紀行』・

『菅の千葉』・『撰西奇遊談』

今後、編者の蓄積と指針に導かれて、近世紀行の世界に遊び学ぶ多くの人が期待される。尚、現在第二巻九州編までが刊行されている。全巻の完結を待望する。

(第一巻 蝦夷編 平成十四年六月 葦書房 B5判 五二

五頁 四、八〇〇円 第二巻 九州編 平成十四年九月 葦書房 B5判 四〇〇頁 三、八〇〇円)

板坂耀子 著

『江戸の旅を読む』

紀行作品の魅力とは、如何なるものであるうか。著者は次のように答える。

あたりまえの生活が何ごともなく続いていくだけの、歴史にとどめられることもなく、小説になりようもない、ありふれた静かなひとときひとときを、書き留めていく作者たちの心のはずみが私にも伝わる。そうやって彼らが記さなければ消えてしまったささやかな風景、つつましい肖像の数々が、言いようもなく貴重に見える。

ともすれば、その文学的価値に疑問を投げかけられ、なおざりに扱われてきた紀行作品、その一つ一つを丹念に読み解き、そのささやかな面白さを我々の眼前に示したものが、本書である。

そうした紀行作品の面白さを伝えることを主旨として、次の二章から構成される。

江戸の旅人たち

出発まで・荷物について・道連れ次第・旅心、定まる・歩け歩け・宿のいろいろ・関所の風景・親切すぎて

紀行文を読み解く

『天石笛之記』が描く平田篤胤 ある国学者の資料

蒐集・佐藤信淵の九州紀行・『旅の恥かき捨ての日記』と日柳燕石・金沢千秋『川めぐり日記』を読む章において、古今東西の旅にまつわるエピソードが紹介されたのち、章において、近世紀行作品の魅力が余す所なく伝えられている。

なお、本書と同時に、『近世紀行文集成』全六巻刊行が開始されている。

(平成十四年五月 ペリかん社 B5判 二五二頁 二、五 円)

白石良夫著

『説話のなかの江戸武士たち』

幕府儒官室鳩巢は、享保の改革を主導した八代將軍吉宗のブレインとして活躍した。その鳩巢が加賀藩の門人青地兄弟に送り続けた書簡の抜き書き集が『鳩巢小説』である。そこでは戦国時代から元禄頃までの事件や人物、さらにわが国古代の史実や中国・台湾などのエピソードが教訓的に語られる、いわば武士の時代を描いた説話（読み物）となっている。本書は、その読み物を「小説」として捉えていた江戸時代の読者たちの視点で読み解く作品論である。その構成は以下の通り。

序章 『鳩巢小説』とは何か

第一章 分別者のくされ知行 山内一豊と大久保彦左衛門

第二章 武功派の出処進退 関ヶ原遅参と榊原康政

第三章 暴君にも惻隠の情 忠直卿行状拾遺

第四章 主人公の登場しない物語 異聞伊賀越敵討

第五章 念のいれすぎは失敗のもと 知恵伊豆の知恵

第六章 殉死と名君 駿河大納言の自害と阿部対馬守

第七章 読み替えられる説話 後光明天皇と魚屋八兵衛

近年、白石氏は日本近世学会において数度に亘り、『鳩巢小説』の新しい読みの可能性を試みられてきた。第一、第四、第七の各章で語られる諸論は近世学会での口頭発表を経たも

のである。氏によれば、十七世紀という時代の空気が武士は、享保改革以後（十八世紀以後）のそれとは少なからず異なるとする。その転換期に生きた鳩巢が当時の武家社会で忘れられつつあった戦場での武士道倫理を郷愁とともに描こうとしたのが『鳩巢小説』であった。

「武功」「分別」をキーワードにして、『鳩巢小説』を読み直し、従来の江戸武士や武家社会の在り方に新しい視座を加えた作品論として、近世文学関係者必読の書といえよう。

（平成十四年八月 岩波書店 B6判 二〇二頁 一、五〇〇円）